

# 24 天明の大火

てんめいのたいか

## 知る

あらまし

天明八（一七八八）年正月三十日におきた、京都の歴史上最大の火災。

鴨川の東、団栗辻子の民家から早朝に出火しました。団栗辻子はいまの団栗橋（四条大橋の南の橋）のかかっているあたりです。

そのままだと被害は鴨川の東に限られたのですが、火は東からの強い風に吹かれ、鴨川を超えて西へひろがり、それからさらに北と南へも拡大し、二月二日朝によく鎮火しました。旧暦では三十日または二十九日が月の最後の日ですから、正月三十日、二月一日、二月二日と二昼夜燃えつづけたわけです。

被害は？

鎮火するまで、北は鞍馬口通、南は七条通、東は鴨川の東、西は千本通までの範囲が焼けました。当時の京都の市街はほぼこの範囲でしたから、京都という大都会が焼け野原になつてしまったのです。

この火災で三万七千軒の家が焼け、六万五千世帯が住む所

を失いました。御所や二条城、東西の本願寺も焼けてしまいました。

火災の影響

まず、京都の経済が大きな痛手をこうむりました。これ以前から、京都の最先端技術が地方に伝えられ、その地で生産された品が全国に広まり、京都の産産を圧迫していました。桐生（群馬県）の織物や銚子（千葉県）の醤油はその代表です。

天明の大火で京都の品物の生産が一時ストップし、右のような京都の苦境はさらに拡大しました。

また、火災で家や家族を失った人たちの苦しみは長く続き、それと共にこの火事は「天明の大火」「申年の大火」とよばれ、長く記憶されることになったのです。

## 歩く／見る

永養寺 下京区寺町通高辻上る

浄土宗。この寺の鴨川をはさんだ向い側あたりの団栗辻子が火元。火は東からの強風にあおられて川を飛び越え永養寺に燃え移り、ここから西と北に燃え広がりました。

清浄華院 上京区寺町広小路上る

大きな火事だったわりには、京都市内では天明の大火の史跡をあまりみかけません。

数少ない史跡のうち、清浄華院（浄土宗）には犠牲者を供養する五輪塔があり、百五十人の死者の墓だと書いています。その横に供養のいわれを書いた石碑が建っています。

清浄華院では火災のあと三月二十四日から七日間、施餓鬼供

養が行われました。



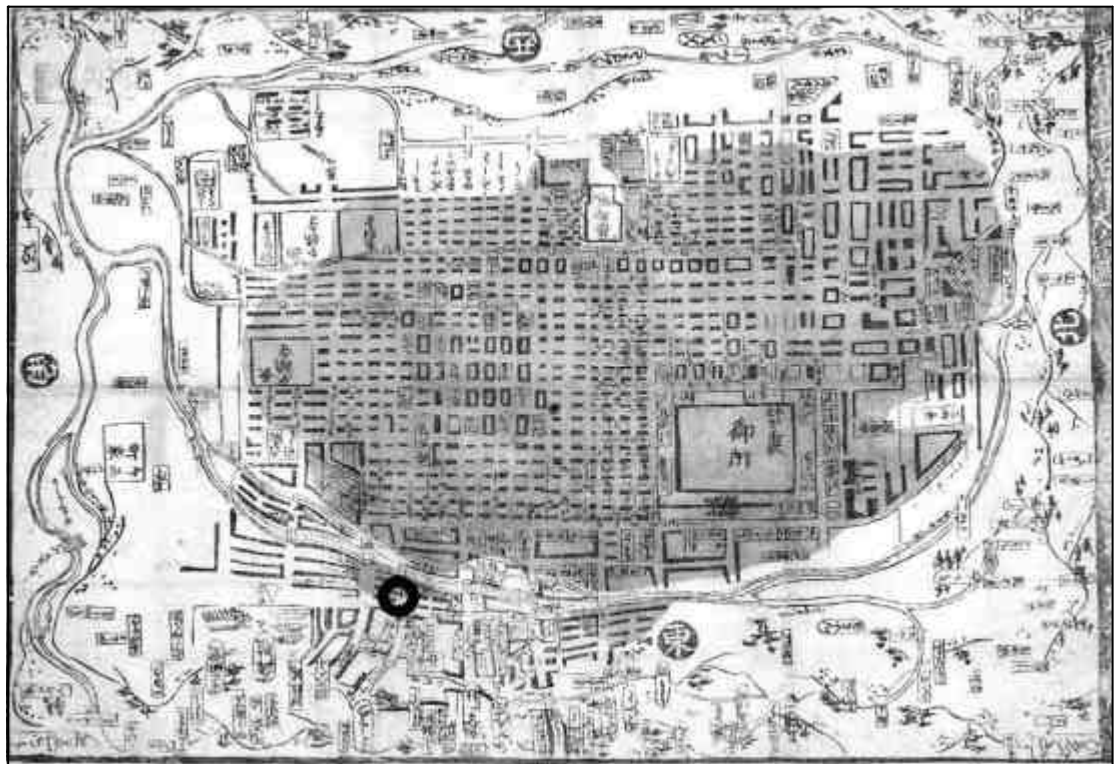
清浄華院境内。中央が供養塔。「横死焼亡百五十人之墓」と書きます。左端の角柱が石碑。

養が行われました。

円通寺 上京区東三本木通丸太町上る

円通寺には、やはり犠牲者を供養する「為焼亡横死」と

刻まれた石碑が建てられています。



天明大火の焼失範囲を示すかわら版。右が北を指し、黒く塗った部分が焼失した。黒い で示したあたりが出火地点。